

6年2組

 みんなが楽しめる大池に  
～大池プロジェクト～


## これも わたしたちの大池

これまで2組の子どもたちが見つめてきた長野小学校の大池。大池をきれいにしたいと願い、水を抜いてヘドロを取ったり、安全に遊んでほしいと考えて、橋を作り換えたり、大池の魅力を伝えたいと思い、遊びの道具を作ったりしてきました。私たちが大池の周りの環境に目を向けているうちに変化してしまった大池と出会い直すきっかけとして、大池の水を顕微鏡で観察する授業を行いました。

現在の大池を見てみると、「もう水が無い」「どうしてこうなってしまったのか」と驚く子どもたち。もう一度、大池をきれいにした方がいいと考えていた子からは、「今なら掃除をしやすんじゃないか」と提案がありました。

今の大池には、中心にコンクリートで固められた部分と、黒いシート上にヘドロが溜まった部分の2ヶ所に水が溜まっています。この2ヶ所は目で見ても明らかに濁り具合が違います。2ヶ所の水を顕微鏡で見比べて、これまでとは違った視点で大池の『今』を子どもたちと感じる1時間でした。

顕微鏡をのぞくと、そこにはミカヅキモやミジンコ、アオミドロの姿がありました。また、教科書には載っていない、見たこともない微生物も見ることができました。私自身、初めて見る、回転する微生物  もおり、子どもたちと共に大池の新たな一面に出会いました。



## 【子どもの振り返りより】

- Aさん：名前のわからない微生物がいた。川にもいるのか見てみたい。
- Bさん：いっぱいいたけど、遊んだ時に微生物がこんなにいたんだと思ったら少しいやだ。たくさんいた中でどれが良くて、どれが悪い微生物なのが気になった。
- Cさん：微生物は、どんなところにいるのか、どうやったらいなくなるのか調べてみたい。
- Dさん：めっちゃ動いているのが大量にいた。こんな中で遊んでいたのか。目には見えないだけでめっちゃいる。どこからこんなにきたのだろう。
- Eさん：気持ち悪いのがいっぱいいた。大池をもっときれいにしたい。
- Fさん：大池の真ん中の水にいる微生物と、周りにはいる微生物は違っていた。真ん中の水の方が見るからにきれいだった。

顕微鏡を通して出会う大池は、これまで、私たちが大池に抱いていた思いとは違った思いを抱かせてくれました。「気持ち悪い」「あの時もいたのかな」という気持ちも本当の大池の姿に迫ったからこそ感じた『わたしにとっての真実』です。真実と向き合うことで、明らかにしていきたいことが子どもたちの中に生まれてきました。

Gさん：微生物は、水をきれいにする生き物じゃないのかなと思いました。理由は、池の真ん中は少し透明だからです。

Hさん：微生物が多いということは、魚が住みやすい環境ということなんじゃないかな。

Gさん、Hさんの気付きは、これから私たちが見つめていくべきことを示しているように思えてなりません。大池にどんな微生物がいて、大池がどのような環境にあるのかということ、環境整備と両輪になって追究していきます。



## 次の大池では、自分も乗りたい

右の写真を見てください。「大池で浮かべるイカダ」作りをしてきた2チームのうち、1チームの試作が完成し、試しにプールで浮かべているところです。

イカダに乗っているIさん。そして、その様子をジッと見つめる仲間たち。写真からも子ども達の緊張の様子が伝わってきます。理科の授業では、大池の水を顕微鏡で観察し、大池に生息する微生物と、大池の中で回っている食物連鎖について学習してきました。植物プランクトン、動物プランクトン、そしてドジョウやフナといったプランクトンを食べている生き物



たちについて調べてきました。そういった目を持っている子どもたちからは、今のプールはまさに微生物だらけです。泥はたまっていないものの、夏のプールとは違い、緑がかった水。肉眼でミジンコを見つけた子もいました。「大池よりはきれいかも」という子。「大池はもっときれいだよ」という子。子どもたちは「イカダを大池で浮かばせる」ことが目的なので、自然と『大池基準』で比べていきます。

さて、写真に写るIさんの足もとは裸足です。最初、靴のまま乗ろうとしたIさんに、Jさんが「靴を脱いだ方がいよ」と声をかけました。

Iさん：やっぱり靴脱いだ方がいよかな。

Jさん：その方がバランスがとれるから。

Kさん：靴下も脱いだ方がいよ。万が一の時に、靴下があった方が帰りはいいから。

Iさん：オレは、靴下なくても帰れるよ。

Kさん：裸足の方が足に力が入るし、バランスもとれるし。帰りも絶対に困らないから。

Iさん：そっか。わかった！

この会話を聞きながら、子どもたちの会話は本当に優しさにあふれているなど感じました。一方では、うまく「イカダに乗る」ということを考えつつ、もう一方では「万が一の時」のことを考えた声かけをしている。Iさんは、イカダに乗ってプールを渡り切る直前に「ふくらはぎが痛い！」と叫んでいました。裸足で絶妙な体重移動をしながらイカダに乗り切ったのです。その様子を見ていたKさんは、「脱出島ってこんな気持ちなんだな」とつぶやいていました。この時間、イカダに乗ったのはIさん（後にLさんも）ですが、Kさんをはじめとして、みんなが「自分自身も乗っている」気持ちになった温かい時間でした。



「今度は先生ね！」と言われ、私も恐る恐る片足を乗せた時に、Iさんが、「先生も裸足の方がいよ！」とアドバイスを送ってくれました。「そうかそうか」と思っていると、『ポチャン!!』『キヤー!!』と言う声。誰か落ちたかと振り返ると、「先生に預かった鍵（プールの機械室の鍵）を落としちゃった」とMさん。「えー!!」とそこからは網を使って鍵の大捜索が始まりました。私の初乗船は次回にお預けです。鍵を捜索している間に、イカダは25mを渡りきり、いつの間にかIさんとLさんの二人乗りとなっていました。



Iさんがイカダに乗っているのを見ていた子どもたちは、「次回の大池の時間は、僕も、私も乗りたい！」という気持ちでいっぱいになっていました。

プールでそうこうしている間に、こつこつと大池の水を抜いてくれた子どもたちがいます。誰が見ているではなくとも、自分たちで動き出している姿に、子どもたちの成長を感じるとともに、感謝の気持ちが湧き上がってきました。ありがとう。